

ちば市民協働 レポート実証実験

千葉県
千葉市



人口：958,161人（H25.3末）

特徴：緑豊かな下総台地にあり、
その一部は東京湾に接する。温
暖な気候、豊かな緑と水辺など
自然環境に恵まれている。

ICTが急速に普及し、その機能も高度化・多様化する中、千葉市では、ICTを活用した住民との協働によるまちづくりを積極的に推進。

平成25年、スマートフォン等のGPS機能やカメラ機能の活用によって、地域で発生している様々な課題について、市民と市役所が協働して解決を目指す「ちば市民協働レポート」の実証実験を実施。住民のまちづくりへの参加意識の醸成にもつながっており、今後の本格実施に向け、注目を集めている。



実証実験時のイベントの様子（平成25年8月）

市民協働にICTを活用

千葉市では、地域で発生している様々な課題の情報を市民からタイムリーに収集し、市民協働により解決を図る、ICTを活用した新たな仕組みづくりを目指している。

そのための実証実験として、「ちば市民協働レポート実証実験（ちばレポートライアル）」を平成25年7月から12月まで行った。

身近な行政課題をスマホでレポート

「ちば市民協働レポート実証実験（ちばレポートライアル）」とは、市民から、道路や公園の不具合等をスマートフォン等で位置情報及び写真付きのレポートをしてもらい、Web上で市民と市役所が情報を共有し、その課題の解決にスピーディーに取り組もうとするもの。なお、投稿はIDにより行われ、個人名は非公開。

実証実験では、850名の市民、391名の職員が参加し、うち、229名が916件のレポートを行った（1日平均6件）。

参加した市民は30代～50代が多く、投稿内容は、道路の陥没や歩道のタイル剥がれの補修、街路灯の電球切れの対応、公園の樹木の剪定やベンチの落書き消しなどの要望が多かった（916件のうち対応済みは702件）。

住民の参加意識の醸成にも寄与

スマートフォン等を活用し、効果的かつ早期に地域の課題のレポートを集め、それを体系的に行政が処理し、そして市民協働という側面も兼ね備える日本で初めての取組は、新しい行政スタイルとして、他団体やマスコミ各社からも大きく注目を集めた。

参加者からの900件を超えるレポートは、地域の課題を可視化させ、市民協働が可能な課題は何かなどを浮かび上がらせた。例えば、道路や公園施設等への落書きの消去、歩道等の草刈り、歩道に散乱するゴミの清掃、集水桝の詰まり解消、街路樹や公園の樹木の剪定などである。

さらに、参加者アンケートの結果、「身の回りの問題をもっと投稿し、よい地域づくりに参加したい」「行政がどのような優先順位で対処し、修繕していくかが分かった」などの声のほか、回答者の約7割が、実証実験に参加することで、まちを歩く際に公共設備の不備や不良な点を意識するようになるなど、住民のまちづくりへの参加意識の醸成につながった。



ちば市民協働レポートの仕組み

今後の展望

他の自治体への展開も視野に入れた仕組みとし、平成26年10月からレポートの運用を始める。

今後は、まちの魅力を市民がレポートするなど、市民同士がまちの情報を共有し、気軽にまちづくりに参加できるツールとして発展させていく。

地方分権改革との関連

千葉市の実証実験を通じて、ICTを活用した市民レポートにより、住民生活に身近な行政課題を、タイムリーに市役所が把握し対応していく新しい行政スタイルの可能性が見えてきた。

市民にとっても、まちづくりへの参加意識の醸成につながるなど、新しい形の住民自治につながるものと言える。

関係者からのメッセージ



北米には、ICTを活用し、市民が緊急を要しない行政への要望等を伝える仕組み（北米311）があります。これをヒントに、多様な主体がまちづくりに参加する、「協働」の概念をプラスした、新311を目指して、「ちばレポ」実証実験を実施しました。

今後、「行政の効率化」をキーワードに、「ちばレポ」は更に進化し続けます。
（千葉市市民局長 金親 芳彦氏）